



彼の名前は今井宏治という。京都の街をよなく愛する遊び人達で、彼の名前を知らない奴はモグリである。が、彼と知り合いの奴は本当に限られた人間である。それは彼が、一見、とっつきにくい風貌をしているのと、ドンと構えて迫力のある体格からきているのかもしれない。

ともあれ、私は彼と話す機会に恵まれたので、「恐い人かもしれん。」などと想像しつつ、彼が現在サウンドプロデューサーとして所属している『True』に行っただけである。

ところが、彼は「ヤア、ヤア、ヤア、お待たせしていません。」と私のイメーヂを根底から覆^{くが}えすような気さくな感じで迎えてくれた。ちよつと面喰らったので、その辺を少し聞いてみると、「僕は人見知りするから、よくそついう風に見られるんですよ。実はそんなに恐い人じゃないですよ。」という答え。それを聞いて、私は内心ホットした。



自称、京に潜む化石。

店に雇われたDJの枠から脱して確固たる地位を築くために、ビクターからデビューする彼の夢は、もつと大きな所にある。

ALL SORTS OF MEN.

京都にはいろんな男がいる

話が弾んでいくうちに、彼のスゴさがひしひしと伝わってくる。流石に京都のDJのお師匠さんであり、また、カリスマとされるだけあって、経歴が波瀾万丈である。彼はもともと大阪出身であった。数々のDJ経験の後、今はなき『アラビアン・ナイト』でDJする為に京都に出てくる。そして、『チャイナ・エクスプレス』、『ピア・スピガ』、『マハラジャ』と活躍する。その活躍ぶりを『全日本リミックスコンテスト』で発揮し認められて、細野晴臣氏プロデュースの名古屋の『ダンスホール』に誘われる。その後、3ヶ月間ニューヨークに飛ぶことになる。彼はニューヨークでかなりのカルチャーショックを受けたらしい。『ダンスホール』がそうであったように、ニューヨークのディスコは日本と違ってクラブブレイク踊る為にディスコに行くんじゃない、曲がかかっているから踊ろうという姿勢の客が多い。そして、DJ自身もサウンドプロデューサーとしてのプライドが必要。もつと突き詰めると、DJというのは、レコードを使ったミュージシャンと言いつてもいいんじゃないのだからか。という結論を持って帰国現在の『True』で音響総合プロデューサーを務める。彼の経歴はこんなトコかな。



エセDJの私に、取材が終わってからもDJの技術などを丁寧に教えてくれた今井さんは、会ってみるとホントに明らかで楽しい人（撮影の時にも、写真うつりが悪いからと言いつつもポーズをあれこれ考えたりして）。でも、仕事に対しては、冷静で厳しい人である。